

## 自由論題 2「中国の地方と少数民族」・報告 1

### 報告テーマ

新疆ウイグル自治区における反右派闘争：少数民族エリートの役割に注目して  
“The Anti-Rightist Campaign in Xinjiang Uyghur Autonomous Region: the Role of  
Ethnic-minority Elites”

### 氏名(所属)

熊倉 潤 (アジア経済研究所)

### 要旨(800字程度)

1957年6月以降、中国共産党(以下、中共)は、民主諸党派の政治参加の要求、中共の「党天下」への批判等に対し、徹底した弾圧をもって答え、「右派分子」の「謬論」を粉砕する「反右派闘争」が始まった。中国全土で55万人以上の人々が「右派分子」に分類され、彼らは公職から追放され強制労働を強いられるなどした。新疆ウイグル自治区(以下、新疆)もその例外でなく、文化大革命後の再審査で判明しただけでも、約3200人が誤って「右派分子」と認定されたという(『中国共産党新疆維吾爾自治区組織史資料』: 109)。ここでいう「右派分子」とは、主に、新疆の「共和国」化を志向し、党の民族政策、漢族幹部の専権等に対し不満を表明していたとして、「地方民族主義者」のレッテルを貼られた少数民族であったと考えられる。

新疆における反右派闘争で少数民族幹部が打倒されたことは、日本でも毛里和子氏により既に詳細に紹介されている(毛里、1981)(毛里、1998: 102-104)。他方、新疆の少数民族の中には、セイフディンはじめ反右派闘争を首尾よく生き延びた人物が存在していたことも一面の事実であり、少数民族エリートの言わば「生き残り方」に焦点をあてた研究は、管見の限り存在しないと思われる。そこで本報告では、新疆の少数民族エリートが中共の新疆統治の正統性に関する議論をどのように展開し、「地方民族主義者」を批判し、党への忠誠心を表明し、党指導部において生き残ろうとしたかについて分析を加えたい。過程追跡を通じて、少数民族エリートが自らの同僚を政権内部に巣食う「地方民族主義者」として批判した構図が浮き彫りになるだろう。

次に、反右派闘争の時期を通じて、新疆ウイグル自治区人民委員会及び党委員会における少数民族の比率がどのように変化したかを考察する。一般に少数民族地域における反右派闘争は、「地方民族主義」の一掃という意味合いもあった。したがって、反右派闘争を通じて少数民族エリートは減少の一途を辿り、自治区指導部における少数民族比率は顕著な低減を示すことになると予想されるが、実際のところ、少数民族比率の下降は限定的であった。この時期大多数の少数民族エリートは政権から追放されずにいたことが、本報告によって示されよう。